

## 2011 年度 KUIS-CLS

### コロキウム・ワークショップ等報告

神田外語大学言語科学研究センター(KUIS-CLS)主催の言語学コロキウム（1回）、言語学講演会・ワークショップ（1回）、アспектフォーラム（1回）が以下のような日程、内容で開催されました。

#### <言語学関連>

##### (1) 言語学コロキウム

日本語にも人称一致はあるか？

日時：2011 年 7 月 13 日（水）17：30～19：30

会場：神田外語大学 2 号館 2-204 教室

講演者：宮川 繁 氏（MIT）

演題：How Uniform Are the Languages of the World?

要旨：

According to UNESCO, there are 6,000 spoken languages in the world. Anyone who has worked in the field in Africa, Italy, or many other parts probably would feel that this is a gross underestimation of the actual number. We celebrate the differences, but as linguists, we also want to know what the languages share in common. How uniform are they, in other words? In this talk, I will extend the work in my recent LI monograph to show that one particular facet of human language — agreement — appears to occur across languages, but it differs from language to language in both the position where it occurs and in the actual implementation of agreement. A question that immediately arises is, what about languages that on the surface do not evidence any morphological agreement — Japanese and Chinese, for example? As we will see, there is clear evidence for

agreement in both. One unique type of agreement, called allocutive agreement, is a form of second person agreement found in the CP domain, and its function is politeness. This agreement occurs in Souletin, a Basque dialect, and its distribution and function match virtually exactly the so-called “performative honorific” of “desu/masu” in Japanese, suggesting that “desu/masu” is a form of second-person agreement. For the more typical subject-verb agreement, we will see that there are different ways in which it is implemented, from the typical pronominal agreement in Romance to clitic agreement in Basque, and this difference has consequences. I will show that Chinese fits into one of these types. So, the answer to the “uniformity” question is, the languages are uniform in having some sort of agreement system that presumably taps the same source, but there is a wide range of ways in which the agreement is actually implemented.

19 : 00～

ディスカッション：日本語の一致現象について

ディスカッサント：

宮川 繁 氏 (MIT)、長谷川 信子 氏 (神田外語大学)、

井上 和子 氏 (神田外語大学)

## (2) 言語学講演会・ワークショップ

日時：2012 年 1 月 28 日 (土) 10 : 00～16 : 45

会場：神戸大学人文学研究科 C 棟 3 階大会議室

共催：Kansai Lexicon Project (KLP)

プログラム：

研究発表

- ・ 高野祐二（金城学院大学）  
多重分裂文と束縛の移動分析
- ・ 于一楽（神戸大学大学院）  
「两碗饭吃了三个人」構文について
- ・ Ryosuke Shibagaki (SOAS) (芝垣亮介)  
Mongolian Resultatives Revisited
- ・ 岸本秀樹（神戸大学）  
日本語の等位節と情報構造
- ・ 遠藤喜雄（神田外語大学）  
副詞節とモダリティー

講演

- ・ 仁田義雄（大阪大学）  
日本語の真正モダリティと疑似モダリティ

研究発表の要旨

- ・ 高野祐二（金城学院大学）  
演題：多重分裂文と束縛の移動分析

Hornstein (1999)の研究以来、（義務的）コントロール現象をコントローラーの移動としてとらえる分析をめぐる議論が盛んに行われている。このコントロールの移動分析は、コントロール現象のみならず束縛現象の分析にも影響を与え、Hornstein (2001)や Kayne (2002)は、（再帰）代名詞と先行詞の束縛関係を代名詞位置からの先行詞の移動により説明する「束縛の移動分析」を提案している。本発表では、日本語の多重分裂文の特性が、束縛の移動分析を支持する新たな証拠を提供することを示す。さらに、この主張が多重分裂文の分析にどのような帰結をもたらすかについて考える。

- ・ 于一楽（神戸大学大学院）

演題：「两碗饭吃了三个人」構文について

中国語の“吃”は「食べる」という動詞である。通常、食べる人は主語に、食べられるものは目的語にあられるが、中国語では、‘两碗饭吃了三个人’（Lit. 二杯のごはんが三人を食べた）といった構文が可能である。本発表では、このタイプの構文に見られる事実を明らかにしたい。

- ・ Ryosuke Shibagaki (SOAS) (芝垣亮介)

演題：Mongolian Resultatives Revisited

Mongolian uses the *-tal* Converb construction to express resultative interpretations. In this presentation I investigate the syntactic structure of Mongolian resultatives, focusing on the status and position of *-tal* phrases. Washio (2002) noted that the *-tal* Converb construction looks very much on the surface like the Korean *-key* resultative. My investigation of Mongolian shows that the *-tal* resultative phrases take a TP adjunct structure which in fact lines up in important ways with the study of Korean by Sells (1998) and Shim & den Dikken (2007). Canonical Mongolian resultative sentences are shown in (1).

- (1) a. *John ene metal-ig havtgai bol-tol*  
       John this metal-ACC flat(A) become-CVB  
       *davt-san.*  
       hammer-PST  
       “John hammered the metal flat.”
- b. *John ene shal-ig gyalalz-tal*  
       John this floor-ACC glitter(V)-CVB

*ugaa-san.*

wash-PST

“John washed the floor, as a result it became glittering.”

(1a, b) show that there are two strategies to express the resultative interpretation in Mongolian. In (1a) *havtgai* ‘flat’ is an adjective, which goes with *bol-tol* ‘become-CVB’ to express the resultant state of the sentence. In (1b) *gyalalz-* ‘glitter’ is a verb, which directly combines with *-tAl* ‘CVB’ to express the resultant state of the sentence. Thus, the two strategies for resultatives can be schematically described as “Adj become-*tAl*” and “V-*tAl*”; adjectives always need *bol-* ‘become’ and verbs cannot co-occur with *bol-* ‘become’. The difference between the “Adj become-*tAl*” and “V-*tAl*” is that the former carries a stronger intention than the latter. However, there is no structural difference at all, which I will show in the presentation. By analysing the sentences (1a, b) syntactically and semantically (I will use several tests such as a) in & for 10mins insertion, b) pseudo-clefting, c) do-so replacement, d) replacement with antonym counterparts, e) additional -NOM & -ACC nouns in embedded clauses) , I will conclude that the Mongolian *-tAl* resultatives take the structure (2). (“SP” stands for *secondary predicate* (it is either “Adj + become” or “V”), and [...] \* means the bracketed clause can occur recursively.)

(2) [Syntactic Structure of Mongolian resultative construction]

SUBJ (NP<sub>1</sub>-ACC) [TP (NP<sub>2</sub>-NOM) (NP<sub>3</sub>-ACC)  
SP-*tAl*] \* V

- ・ 岸本秀樹（神戸大学）

演題：日本語の等位節と情報構造

本発表では、日本語の選言的な等位節を見ることによって、日本語の命題構造（TP）上に存在する投射がどのような要素と結びつくかを見ることができることを示す。本論では、特に、動詞または時制辞に付加される接続小辞が、TP を等位接続するために、等位節内部に TP よりも上位に投射される要素が現れ得ないことを論ずる。

- ・ 遠藤喜雄（神田外語大学）

演題：副詞節とモダリティー

Larson(1990)以来、時の副詞節内部では、演算子移動が関わっていることが指摘されている。一方、日本語では、対応する文において、演算子移動が関わっていると思われる事例と関わっていないと思われる事例が混在している(Endo 2011, Miyagawa 2011)。本発表では、副詞節のフォーカスに注目して、演算子の移動と副詞節のフォーカスに相関性があることを示し、移動の引き金が談話に関わる素性であることを見る(cf. Miyagawa 2010)。そして、副詞節のフォーカスの可能性と副詞節の内部に生じるモーダル要素の相関性を論じる。

## 講演要旨

- ・ 仁田義雄（大阪大学）

演題：日本語の真正モダリティと疑似モダリティ

モダリティをどのようなものとして捉えるかについて述べ、そのような捉え方をすると、モダリティを表すとされるものに中に複数のタイプが存在する。そのようなタイプとして、真正モダリティと疑似モダリティと名づけられるものがある。真正モダリティの存在

場所はどのようなところなのか。モダリティ形式は、連鎖する場合、どのような連鎖を取るのか。モダリティとそれが出現する節の文的度合との相関についても考えてみる。

### (3) アспект・フォーラム No. 2

(コーディネーター：岩本遠億)

日時：2012 年 3 月 6 日（火） 14：00～17：15

2012 年 3 月 7 日（水） 10：00～15：45

会場：神田外語大学 2 号館 2-201 教室

プログラム：

3 月 6 日（火） 言語学講演会

- ・ 由本陽子（大阪大学）

語彙意味論と世界知識

- ・ 岩本遠億（神田外語大学）

事象投射理論とアспект類型

3 月 7 日（水） 研究発表会

- ・ 小西正人（北海道文教大学）

現代日本語の「どんどん」文の事象構造分析

- ・ 林君憶（神田外語大学大学院）

テイルと「着」一日中アспект対照

- ・ 布川雅英（神田外語大学）

中国語の完了について

- ・ 都築鉄平（南山大学大学院）

「シタ」と「シテイル」の使い分けに関する語用論的  
考察—韓国語・中国語との比較から

コメンテーター：

浜之上幸（神田外語大学）、井上優（麗沢大学）

## 講演要旨

- ・ 由本陽子（大阪大学）

演題：語彙意味論と世界知識

語彙意味論は、LCS（語彙概念構造）によって動詞の意味と項の具現形の対応関係を説明することで発展してきた。近年、生成語彙論（Pustejovsky 1995）によって提案されたクオリア構造を用いることによって、従来語用論の問題とされてきた現象を語彙意味論の問題として説明できることが示されてきている。本講演では、近年の語彙意味論の動向を紹介した上で、クオリア構造が意味解釈や意味拡張の説明のみならず、項の具現に関わる問題にも重要な意味表示レベルであることを明らかにしたい。

- ・ 岩本遠億（神田外語大学）

演題：事象投射理論とアスペクト類型

事象投射理論（岩本 2008）は、次元性（点・線）、（非）有界、（非）連続性、関数（投射、断面化、有界化、非有界化）といった物理数学的概念、および関数適用を制限する一般原理と相強制によって言語のアスペクト現象を説明しようとする。本講演では、これまで直感的に語られることの多かったアスペクト対照研究や類型論に関わる事実認定や論点が、これらの概念および、語彙化に関する事象分析を用いることによって整理されることを論じる。

## 研究発表要旨

- ・ 小西正人（北海道文教大学）

演題：現代日本語の「どんどん」文の事象構造分析

現代日本語の修飾表現「どんどん」を含む文について、岩本（2008）で提示された事象投射理論による分析を行う。「どんどん」により修飾される状態変化自動



詞文を「程度の進行を表すもの」「対象の部分・範囲の進行を表すもの」「事象・対象の複数を表すもの」の三つに分け、それぞれを岩本の「自己基準位置変化事象」「増分的段階性到達事象」「複数事象」の構造を用いて分析するとともに、修飾表現「どんどん」がもつ事象意味の一般的表示を試みる。

・ 林君憶（神田外語大学大学院）

演題：テイルと「着」一日中アспект対照

事象投射理論（岩本 2008, 2011）を用いて、中国語アспект研究において「在」と比較されることの多い「着」の分析を行う。「着」は、変化が一定期間持続することを含意する使役変化動詞に接続した場合、進行の意味を表す他動詞文となるか、結果持続の意味を表す自動詞文となる。「着」を「限界的連続時間」から「限界点を取り除く関数」と仮定すれば、事象投射理論で示された複合事象分析と関数適用にかかる一般原理で、この事実の説明が与えられる。

・ 布川雅英（神田外語大学）

演題：中国語の完了について

日本語を母国語にしている我々にとって、中国語の「完了」は、実は理解し使いこなす事が難しい文法項目の一つである。授業のテストや中国語検定試験においても、「完了」は必ず出題される文法項目である。しかし、採点の際には、学習者の理解が不十分であることを痛感させられる。今回は、これまでの教学の経験や検定試験の採点委員の経験から、日本語を母国語にしている我々は、なぜ中国語の「完了」を理解し難いのか、我々は中国語の「完了」をどのように捉え、理解すべきか、話を進めて行きたい。

- ・ 都築鉄平（南山大学大学院）

演題：「シタ」と「シテイル」の使い分けに関する語用論的考察－韓国語・中国語との比較から

日本語の非完結相マーカー「(te)i-」は結果相やパーフェクト相を表すと言われるが、現在の結果状態や現在パーフェクトを表すのに使用される場合、過去/完了を表す「ta」との違いが問題となる。本発表では、両者の違いを語用論的に分析し、日本語同様に結果状態を表す非完結相マーカーをもつ中国語や韓国語における完結相（過去）と非完結相現在の使用範囲と比較することで、結果状態及びパーフェクトと呼ばれる「(te)i-」の意味についての考察を行う。

平成 20-23 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B)  
「語彙とテキスト理解：読解に関わる語彙知識の多面性と語彙の意味について」

研究代表者 堀場裕紀江

## 2011 年度 研究概要

本研究プロジェクトは、テキスト理解にかかわる言語（語彙）とそれに関する知識（語彙知識）について理論的・記述的・実証的研究を行い、その結果に基づき言語教育に向けての有益な示唆を提供することを目的とする 4 年計画プロジェクトである。4 年次（最終年次）にあたる 2011 年度は以下の活動を行った。

言語習得研究班（堀場裕紀江・深谷計子・松本順子・鈴木秀明・西菜穂子・李榮・山方純子・田所直子）は、まず、本研究プロジェクトにて開発した中級～超級学習者対象の日本語語彙テスト（JWMT:語義テスト、JWAT:語連想テスト）の応答データを、語の頻度と種類（品詞および語種）、連想の種類、母語、学習環境などの影響について分析した。また、簡略版語彙テストを用いて、日本語学習者の語彙知識と読解の関係を調べるための実験を複数行った。まず、語彙知識の多面性が読解にどのように関わるかを調べるために、Horiba (2012) を発展させた実験 1 は、日本語学習者 65 名を対象に行い、その分析結果をまとめた。実験 2 は、韓国語を母語とする日本語学習者 63 名を対象に、語彙知識が読解と作文のそれぞれにどう関わるかを調べることを目的として行ったもので、収集したデータは現在分析中である。

また、読解におけるタスク効果についてのこれまでの研究 (Horiba, 2008; Horiba & Fukaya, 2012) を発展させた実験を複数行った。実験 3 は、説明文読解におけるプロセスが語彙知識とタスク指示（テキスト心表象のレベル形成に関わると予測されるもの）によってどのような影響を受けるかを調べる

ために、日本語学習者 30 名を対象に行った。実験 4 は、語彙知識とタスク指示（言語処理と概念処理への認知資源の配分に関わると予測されるもの）が読解と作文にどのような影響を与えるかを調べるために、英語学習者 75 名を対象に行った。これらの実験で収集したデータは現在分析中である。

さらに、本研究プロジェクトの進行に伴い、読み書きと語彙の関係、テキスト処理におけるタスクの影響などの研究分野の新しい動向を捉えるために、文献検索および定例勉強会を開催した。上記およびこれまでの研究の成果については、応用言語学・言語教育学分野の複数の国際学会（World Congress of Applied Linguistics; International Conference on Japanese Language Education; American Association for Applied Linguistics）にて口頭あるいはポスター発表を行い、応用言語学・言語教育学関連の主要国際学術雑誌（The Modern Language Journal）や専門書（TBLT Series, John Benjamins）、および、国内研究機関紀要にて論文発表した（あるいは発表予定である）。

言語研究班（木川行央・岩本遠億）は、共通語、東京語の基盤となる首都圏方言の実態を探るため、神奈川県小田原市において 86 歳から 11 歳までの 72 名を対象に音声・アクセントを中心に調査を行い、その結果をまとめた。また、テキスト理解のための主要要素となるテンス・アスペクト解釈の類型論について、事象投射理論（岩本 2008）に基づく研究方法を発展、明示化した。特に、言語間によって異なる語彙化パターンがアスペクト解釈に及ぼす影響、事象のアスペクト特性の決定方法に関わる強制の役割、アスペクト範疇の判定方法などについて重点的に研究を行った。これらの研究の成果については、3 月に本学にて開催された『アスペクトフォーラム』研究会（コーディネーター/講師：岩本、講師：由本陽子氏（大阪大学）、発表者 4 名）で口頭発表、または、国内研究機関紀要にて論文発表した。

平成 21-23 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B)  
「談話のカートグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して」

研究代表者 遠藤喜雄

## 2011 年度 研究概要

本科研プロジェクトは、文の統語構造を地図のような形で詳細に解明する (cartography of syntactic structures : 以下、統語構造地図／カートグラフィー) というプロジェクトの中で主文と複文の違いと共通点を示すことを目標とする 3 年計画のプロジェクトである。2011 年度には、以下の活動を行った。

まず、海外からの研究者を招聘する試みに関しては、5 月に日本英文学会にあわせて、九州大学と北九州市立大学において Ian Roberts 氏 (ケンブリッジ大学教授) を招聘し、ワークショップと講演会を開催した。日本語からの貢献の可能性として、ワークショップにおいて、遠藤喜雄 (神田外語大学)、漆原朗子氏 (北九州市立大学)、前田雅子氏 (九州大学／日本学術振興会)、榎田裕加氏 (中部大学) が Roberts 氏の研究に関係する研究発表を行い、Roberts 氏と討論を行った。

次に、本科研のプロジェクトのもう一つの目標である、優れた日本語学／英語学の研究成果を広く海外に発信し、カートグラフィーの枠組みを通して、世界レベルまで引き上げるという試みを行った。具体的には、12 月には、ノルウェーのトロムソ大学で開催されたカートグラフィーの国際会議で、遠藤喜雄 (神田外語大学) が、招待研究発表を行った。ここでは、特に、日本語学の研究成果を取り込んだ研究発表を行った。そして、1 月に神戸大学で、文の周辺部についてのワークショップを行った。そこでは、遠藤喜雄 (神田外語大学)、高野祐二氏 (金城学院大学)、岸本秀樹氏 (神戸大学)、芝垣亮介氏 (SOAS)、于一楽氏 (神戸大学大学院)、仁田義雄氏 (大阪大学) により研究発表が行われた。

これらの研究成果は、研究報告書にまとめあげ、後に出版する予定である。



平成 21-23 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

「首都圏方言の実態に関する基礎的研究」

研究代表者 木川行央

## 2011 年度 研究概要

本研究は、首都圏の方言について、従来の伝統的方言体系を踏まえつつ、現在の動態を明らかにしようとするものである。今回対象とするのは、静岡県東部・山梨県・神奈川県・埼玉県の方言である。これらの地域の言葉には、東京方言の古い姿が残っている場合がある。その一方で、これらの地域の方言形式が東京でも用いられるようになり、さらに全国で用いられるようになることもある。このように東京方言・共通語を考える上でも重要な地域の言葉であるが、東京方言との類似点が多いためか、十分な調査分析が行われてきたとは言い難い。本研究はこの欠を埋めるべく計画したものである。

今年度は、上記の地域のうち、神奈川県小田原市穴部において、変容の姿を見るため、86 歳から 11 歳までの 72 名を対象とした多人数調査を行った。調査項目は、2011 年 1 月に同地において行った調査結果をもとに選定した、アクセント 55 項目（東京で変化の見られる名詞・複合動詞・接頭辞のついた形容詞の終止形・形容詞の活用形など）、音声 6 項目（連濁、直音化、ヒとシの混同、ラ行音の撥音化、最近の傾向として指摘されることの多い雰囲気や原因をゲインとする発音など）、文法 9 項目（ベーの用法中心）、語彙 4 項目である。その結果、東京語の古い相が確認できたと共に、若い世代には東京に見られるのと同じ変化がみられる点などを確認した。この調査の結果を論文にまとめた。

また、本研究の始めに行った、静岡県賀茂郡松崎町におけるアクセントについての研究についても、論文として発表した。





平成 23-25 年度 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (B)  
「述語の意味と叙述タイプに関する統語論からの考察：機能  
範疇統語論の構築を目指して」

研究代表者 長谷川信子

## 2011 年度 研究概要

生成統語論は、その発展と変遷を振り返れば、「語彙範疇」から「機能範疇 (FC)」へシフトしてきたと言える。本研究に先立ち、長谷川は、平成 19-21 年度の科研(B)『文の語用的機能と統語論：日本語の主文現象からの提言』において、FC のうち CP 領域の現象を考察し、日本語には（英語他のヨーロッパ言語に比べ）IP より CP に文構築に関わる様々な現象が観察されることを見てきた。そうした研究から、FC が異なる意味領域（CP では、論理的意味と語用的意味）を繋ぐシステムであることを明らかにしてきたが、本研究では、そこで得られた知見を、さらに、vP および IP 領域の現象（述語の意味・アスペクト・時制およびそれらと関わる動的事態、状態、属性といった叙述のタイプなど）へも適用し、言語における機能範疇の統語構造と統語操作が、言語の持つ意味といかに関わるかを解明することを目指している。

3 年間のプロジェクトの初年度である今年度は、CP 領域と IP 領域の関係性を明らかにし、そこでの知見を次年度以降の vP 領域との関係性に生かすべく、文のタイプと時制表示と解釈の関係を中心に扱った。考察したのは、現象描写文(Thetic Judgment)、場所倒置文、主文の文タイプ・時制解釈と関わる従属節としての「ト条件節」の振る舞いなどであり、CP 領域の Fin での「実現性」の指定が IP で具現する述語の形態に関わることを明らかにした。同時に、Fin-IP の時制解釈が主語の PRO 生起の可能性や人称タイプと関わることを示した。また、強調構文の Cleft 文の「ダ」「be」の時制と前提部の関係を探り、Cleft 文における日本語と英語の時制表示の違いを討

議し、その統語構造と談話の関係を考察した。

これらの研究成果は、国内外の学会や研究会（2011年6月に韓国言語学会、11月にプラハのカレル大学での統語と談話の接点に焦点を宛てた学会、12月日本文法学会のシンポジウム、および、MITの言語学科50周年記念の研究会でポスター発表、2012年2月にカリフォルニア大学ロサンゼルス校、南カリフォルニア大学での研究会）で、講演、発表した。これらの機会には、参加者および国内外の研究協力者から他言語からの知見も受け、活発な討議を行うことができ、それらは、本研究の今後2年間に生かすことになる。

今年度は、上述のようにIP領域の時制の表示とCPの関係が中心となったが、その関係性に見られる操作と条件を、今後は、vPレベルに表出する述語の意味とアスペクトと文全体（IP、CP）のアスペクトの関係との関わりで検証し、隣接する機能範疇の局所的関係性を保証するメカニズムを明らかにする所存である。